



「特集」楽しく体験! すべてに優しい! 佐世保らしい動植物園づくり!

動植物園 活性化 計画

市亜熱帯動植物園では、施設の老朽化と来園者のニーズに対応し魅力ある動植物園にするため、平成19年度に「活性化計画」を策定しました。キーワードは「つなぐ」。この言葉を基に、計画は本年度から動き出します。

開園50周年に向けた課題

昭和30年3月に西海国立公園の指定を受けた本市は、国立公園の特色をさらに生かすため、九十九島の眺めが良い石岳の中腹(船越町)に市亜熱帯動植物園の設置を計画しました。開園まで3力年にわたる大事業で、同33年に着工(総工費一億二千万円)、同36年6月、市民待望の憩いの施設として全国では26番目、西九州では唯一の公設公営の動植物園として開園し、現在まで約980万人が訪れています。

当時、柵や金網がなく、堀を挟んでライオンやクマなど放し飼いの動物が見学できる自然動物区は全国でも珍しく、連日多くの人々にぎわいました。しかし、来園者数は昭和55年度の年間25万人を最高に、その後は減少傾向となり、平成16年度には過去最低の年間14万人となりました。

同園は来園者を増やす取り組みとして、動植物園の魅力由来園者に伝えるために結成された市民サポーター「サザンボス隊」や各種団体の協力を受けながら、イベントを行ったり、動物本来の行動・生態の様子が見学できる行動展示を取り入れたりと、さまざまな工夫をしてきました。また、親を失ったツキノワグマの子ども2頭を受け入れたり、休日を中心に動物の生態学習会や餌やり体験、ウサギやモルモットなどの小動物とふれあえるイ

ベントなどを行ったりして、楽しみながら、動物と人間の共生の大切さや命の尊さも伝えてきました。

このような取り組みによって、同17年度以降の来園者は回復傾向となり、その後も夜の動植物園(本紙14ページ参照)の実施や、年間パスポートの導入などの効果もあって、近年では年間入場者数も20万人に迫るまで回復しました。

同19年には、同23年の開園50周年に向けて、動植物園の現状や課題を把握し、この回復傾向を長期的に持続させる方法を探るため、来園者に施設やサービスに対してのアンケートを実施しました。アンケートでは、「園内が変わり映えせず、あまり関心がない」「放飼場が狭くて見づ

市民の財産である 動植物園を未来へ!

本園は石岳動植物園の愛称で親しまれ、市民の皆さんと共に歩み続けてきました。今後も皆さんにご協力をいただきながら輝き続け、貴重な財産である同園を未来につないでいきたいと思ひます。



市亜熱帯動植物園 江頭光則 園長

らく、動物と離れ過ぎていく。動物が動かない」「園路が歩きにくく、案内が不十分」「トイレが少ない。駐車場が狭い」などの意見が寄せられ、娯楽の多様化や人の価値観の変化、施設の老朽化への対応などの課題が明らかになりました。これらの課題を克服するためには、動植物園の社会的な役割と施設機能を見直すことが必要であり、新しい動植物園づくりに向けた「動植物園活性化計画」(以下、計画)を策定することになりました。

いのちをつなぐ 活性化計画

同園では「地域の素晴らしい自然や絶滅する恐れのある希少動物を通して、今住んでいる地球環境の現状を伝える場」「いのちの尊さを学ぶ場」として、人と自然をつなぐことが動植物園の役割であることを再認識し、これを社会的な役割と位置づけ、「いのちをつなぐ」動植物園」を計画の目標に掲げています。

この目標は、動植物や自然環境を未来につなぐほか、人と人、園と人をつなぐことも意味しており、子どもから大人まで心から憩える場所の提供と、市民参加で運営される動植物園になることを目指しています。

また「楽しく体験・すべてに優しい・佐世保らしい魅力あふれる動植物園づくり」を基本に、驚き・感動・発見・喜びをもたらす施設の整備も計画しています。

(表1) 活性化計画の年次スケジュール

時期(平成)	整備内容
20年度	● 計画の基本設計・全体測量
21年度	● ふれあいゾーンの整備 ヒツジ・ヤギ・モルモット・ウサギ等とのふれあい体験施設 ミーアキャット・プレーリードッグ等の行動展示場「土の城」 学習ホールなど ● ツシマヤマメコ飼育・繁殖施設の整備 ● トイレ・授乳室の新設
22年度	● モンキーゾーン(樹上性)の整備 テナガザル・ニホンザル展示施設 ● ツシマヤマメコ展示施設の新設 ● 駐車場の整備
23年度 (開園50周年)	● ペンギン水槽の整備 ● 展望デッキ・レストランの新設

※計画内容は、動植物園を取り巻く状況により変更になる場合があります。
※計画の進捗よく状況(集客状況や市民の評価・要望など)や社会経済情勢の変化を見ながら、表1以外の施設についても整備計画を検討していきます。

今夏から計画が始動

計画は平成23年度までの4年間にわたる開園以来の大事業で、総事業費約12億6千万円を掛けて年度ごとに施設の整備などを行う予定です(表1参照)。目標年間入場者数も開園50周年までに、過去最多となる25万人突破を目指しており、目標達成に向けて長崎県や本市の特色を生かした動植物園づくりを進めていきます。

長崎県は国内で最も島が多く、島々にはその場所にしかない生き物「固有種」がたくさん生息しています。固有種は、その存在自体が貴重であるだけでなく、環境破壊の問題などさまざまなメッセージをわたしたちに教えてくれる宝物です。対馬だけに生息する国の天然記念物

「ツシマヤマメコ」や対馬で飼育されてきた日本在来馬「対州馬」、五島列島を種の起源とする「シバヤギ」、九十九島に生息する「カノコユリ」「トビガズラ」など、これら固有種と園をつなぐ、いのちの尊さや環境問題などについて皆さんと考えていく場をつくり、人と動物が共存してきた歴史や文化なども紹介していきたいと考えています。

本年度は多くの入園者が期待している「動物とのふれあい体験」の充実と、「ツシマヤマメコ」の飼育・繁殖施設の完成を目指して、8月下旬から整備工事を始めます。

市民の皆さんには、同園が本市の貴重な財産であることを認識していただき、これからの動植物園づくりに参加していただきたいと思います。